

も同様に解しておられる。

789 『平安朝歌合大成』による。

10 後撰集一三五六「土左よりまかりのぼりける舟のうちにて見侍りけるに山のはならで月の浪のなかより出づるやうにみえければ、昔安倍仲麿が唐土にてふりさけみればといへることをおもひやりて」の詞書で入っている。

11 『八代集抄』「土佐日記みやこにて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ 此歌を少引かへてにや。」

12 長保三年十一月十七日奉幣使として出発（『権記』『御堂関白記』）、翌長保二年二月三日帰京報告をしている（『御堂関白記』）。

13 寛弘二年十一月十五日、廿七日、十二月九日『御堂関白記』に関連記事が詳しい。

14 摂政始移徙新造東三条第一焼亡之後有饗。三日宴管絃之事。

15 『尊卑分脉』従五上。死去については『御堂関白記』寛弘七年三月卅日条裏書。

16 六月二十五日 御葬事

「山作所 行事 為義朝臣左衛門権佐、中宮大進 撰津守」（『権記』）

17 「勅負佐」 橘為義文四位 佐。撰津守 「兼受領人」 為義撰津守

八年六月二十五日条<sup>注16</sup>までまたねばならないが、<sup>(寛弘九年)</sup>長和元年十一月廿九日付の

『類聚符宣抄』<sup>下</sup>「就・留案・勘<sup>中</sup>会公文<sup>上</sup>」前司藤原朝臣方正任中寛弘元二

三四并四ヶ年減省符班符宣旨等事」に、必要な部分のみ摘記すれば「摂津

国……(中略) 前司守從四位上藤原朝臣方正。去寛弘二年六月十九日任。

同六年正月廿八日得替解任。(中略) 但守為義朝臣当任」とあるところ

から、その事実は確認される。京官は元のままでの兼官であった。『二中

歴』<sup>注17</sup>「勅負佐」・「兼受領人」の項にもその旨がみえる。当初の寛弘六年

については記録類には全くその名をみないが、七年三月十四日、行成の仰

せにより摺袴を献じ(行成十一日より石山詣の条『権記』、五月二十三日に

は道長家法華三十講の非時を儲け、十二月四日には「為義朝臣許、馬七疋

令飼」(御堂関白記)等と見えている。八年に入り正月五日從四位下に加

階した。『権記』には

正月 (前文欠)

今日丞相依召参内、被定藏人、左兵衛少尉橘義通<sup>元殿上</sup> 文章生藤原章

<sup>信所雑</sup>色 東宮学士広業朝臣、左衛門権佐為義朝臣等如旧昇殿……

とあって日付を欠き、文中に誤脱があるらしく、この文意では、藏人に任

じたかの如くであるが、広業の『公卿補任』尻付によれば「八正五從四下

(策旁、卅五)」とみえるのは、この日のことである。従って、続く「左

衛門権佐為義朝臣」も広業と同列に「從四位下」に叙されたのであって、

二人とも藏人に任じたわけではない。『権記』の記述の「東宮学士」の前

に誤脱があるのであろう。ずっと後年の記録になるが、弘安十一年正月五

日付『勅仲記』「四位廷尉佐年々」に「八年 左佐從四位下橘為義<sup>正月日</sup>叙從四<sup>下宣旨</sup>如元」<sup>下宣旨</sup>と記されることもこれを裏付けていよう。

そして、二月十日昇殿が聴されている(『御堂関白記』)。

六月二十二日、一条天皇崩御。二十五日御葬送に関する雑事の定めがあり、此日広業、光榮らと共に葬送所を実検し定めることに奉仕した。為義は国挙らと共に「山作所」行事の担当となり、七月八日の葬送日には無事その任を果している。八月二日院御法事、十一日御読経結願にと奉仕したが、この日、新帝(三条帝)が六月より御滞在中の左大臣東三条第から内裏に入られ、左衛門権佐為義も昇殿、いよいよ三条天皇の新しい時代を迎えたのであった。

#### 《注》

- 1 輔尹集 39 40 41 42 43 44 56 59 番
- 2 道濟集 76 86 番
- 3 水野隆氏「歌人藤原輔尹」(『和歌文学研究』二十七号)五島和代氏「源道濟試考」(『文芸と思想』三十二号)
- 4 正しくは「輔尹」。「天の原」の歌は輔尹集 56 番。東三条院四十賀の行われた長保三年十月現在右少弁。
- 5 『公任集』 308 311 番
- 6 村瀬敏夫「藤原公任伝の研究」(東海大学文学部紀要 昭和35年3月)に於て

孝道、善言、弘道、以言、業直、輔尹、為時、敦信、通直、宣義、積善、時棟、忠真、頼国、義忠、章信等」(御堂関白記)の名があるが為義は見出せない。文人にえらばれて然るべきであるが何か支障があったのか。関五月十七日には道長の金峰詣のための長斎を始めたが、籠る人々の中に為義の名も見えるから在京していたはずであるが。

また、九月九日重陽宴には「菊花映宮殿」で詩が賦された。「寛弘四年九月九日記」によれば「文人参入四五位一列」「幄下文人進文台下、献詩」等の記述が見えるが、四・五位の文人については必ずしも分明ではない。為義の出席しうる場としての可能性を認めておきたい。

さて『本朝麗藻』にはもう一首、左相府道長らと同座しての作と思われる道長の詩の後に同題の左の詩が入っている。作詩の時期は不明であるが併せて記しておく。

同前(左右好風来)

橘 為義

一従水閣避炎光。

唯任好風左右涼。

暮入西牕飄案牘。

曉経東戸拂琴堂。

先収短袖数行汗。

忽動佩刀三尺霜。

何必当初河朔飲。

池頭今日勸殘腸。

## 六

寛弘五年七月十二日一つの事件があった。『小右記』は次の如く記している。

滝口安倍為方途中会左衛門権佐為義、々々咎不下馬之由、欲彈弓箭、為方稱「滝口」、仍只切狩衣袖、為方偏思恥辱、自切髮投入母宅、忽走到東山寺剃頭云々、件為方故忠並朝臣孫、滝口内舍人為良子也。

滝口安倍為方を出家に走らせた事件であった。時に為義は左衛門権佐、檢非違使を兼ねていた。またこのころ中宮大進でもあった様子である。九月十一日誕生した皇子敦成の三夜の儀、庁官奉仕御産養が十三日に催された。『紫式部日記』に

三日にならせ給ふよは宮つかさ大夫よりはじめて御うぶやしなひつかうまつる。右衛門のかみはおまへの事、ぢんのかげばんしろがねの御さらなど、くはしくはみず。源中納言藤宰相は御ぞ御むつき云々

とみえる夜のことである。『不知記』には詳しい記述の中に氏院参賀の行われた事が

勸学院率別当弁右大弁説  
孝朝臣以下弁学生参入、権大進橘為義取見参。先覽大

夫、次令啓之、聞食之由仰了後、別当弁以下学生等、列立南庭、再拜退出

と見え、中宮権大進として働く為義の姿がある。時に中宮大夫は齊信、権大夫は俊賢であった。

寛弘六年正月二十八日県召除目が行われた。この日為義は藤原方正の後を襲って摂津守を拝任した。「摂津守」と明確に記録に記されるのは寛弘

と、昔、今のことを対比的に述べる。またその詩には

君臣宴樂歡游好。

君臣の宴樂歡游好ましく

落葉乱葩<sub>レ</sub>度<sub>レ</sub>水輕。

落葉乱葩水を渡りて輕し

霜葉冬題陪<sub>レ</sub>地下<sub>一</sub>。

霜葉の冬題は地下に陪し

風花春宴近<sub>レ</sub>皇明<sub>一</sub>。

風花の春宴は皇明に近し

醉歌得<sub>レ</sub>赴桃源路。

醉歌赴い得たり桃源の路

踏舞欲<sub>レ</sub>看李部采。

踏舞看んと欲す李部の采

翰墨寄<sub>レ</sub>身頭己白。

翰墨に身を寄せ頭己に白く

鶯兒未<sub>レ</sub>長動<sub>レ</sub>心情<sub>一</sub>。

鶯兒未だ長せざるに心情動く

と賦し、三・四句は明らかに二十年前の卑官のころと現在とが対句的に扱われている。

匡衡の序文・詩の証明するところによつて、為義および孝道のよんだ、「二十年前」云々が永延元年十月十四日の東三条第行幸をさしているであろうことは間違いないものと思われる。

二十年前、つまり永延元年（987）における為義についての資料的手がかりは全く無いが、すでに述べたように正暦四年（993）正月九日には「藏人所雜色文章生橘為義」（『権記』）とあつて、正暦四年当時文章生であつたことがわかつてゐる。したがつてそれより六年前、とすればおそらく擬文章生であつて、十月十四日に試を奉じた一人ではなかつたかと推察される。因みに『日本紀略』によれば、十六日に擬文章生試の評定が行われた。恩澤を蒙つて、文章生へと進んだことが「二十年前花下情」の背後に含まれ

ているものであらうと考える。

なお孝道は、二年後の永祚元年（989）三月二十日条『小右記』によれば、「孝道朝臣」とみえるので、おそらく為義らと共に擬文章生奉試を蒙つたものではなく、浅緋の身として列した一人であつた可能性が強い。訴嘆の色濃いよみぶりであるが、遂に寛弘七年ころ越前守として没するまで、五位の浅緋の色の改まることはなかつたようである。

道長を中心とした公卿たちまた文人たちとの詩文の交友は、寛弘三四年の交、私的にも頻繁に催されていた。しかし記録の在り方が身分低いものについては具体性を欠くため、その出席について多くは不分明である。今、公的な催しについてその可能性を考えてみたい。

寛弘四年三月三日、上東門第において曲水宴が催された。式部大輔輔正の出題「因流汎酒」が用いられ応教詩を賦した。出席者について『御堂関白記』は

右衛門督（齊信）、左衛門督（公任）、源中納言（俊賢）、新中納言（忠輔）、勘解由長官（有国）、左大弁（行成）、式部大輔（輔正）、源三位（經房）、殿上地下文人廿二人、

と伝える。「殿上地下文人廿二人」中には恐らく為義も入っているに相違あるまい。翌四日講詩が行われている。

次いで四月二十五日・六日内裏密宴が行われた。「所貴是賢才」の詩題、「公卿以下属文之輩、多献詩」（日本紀略）とあり、具体的には「文人為憲、

の光景である。しかしながら為義の詩の第七、八句には、目前の盛大な花宴に重ねて二十年前に蒙った恩澤をなつかしみ嘆ずる感がありはしまいか。本朝麗藻に見る詩の中で、もう一人同様に

仙家春暮落花盈。

仙家の春暮落花に盈ち

度<sup>レ</sup>水舞来変態輕。

水を渡り舞来たるは変態輕し

紅袖濃葩遮<sup>レ</sup>波処。

紅袖は濃き葩のごとく波を遮る処

羅裙彩艶過<sup>レ</sup>流程。

羅裙は彩り艶にして流れを過る程

岸<sup>ニ</sup>妓樹<sup>一</sup>砂風送。

岸は妓樹に<sup>(ママ)</sup>応えて砂風を送り

林是粧樓浦月迎。

林は是粧樓にして浦月を迎う

二十年前重侍<sup>レ</sup>宴。

二十年前重ねて宴に侍すとも

浅緋未<sup>レ</sup>改白頭情。

浅緋いまだ改まらず白頭の情

と詠んでいるものがある。それは源孝道であつた。

「二十年前」とは、永延元年（987）にあたる。一条天皇即位の翌年のことである。この年東三条殿への行幸は二度行われた。その一度目は正月二日朝觀行幸で、『日本紀略』や『扶桑略記』等には見えないが『栄花物語』「さまざまのよろこび」に

はかなく年もかへりぬ。后の宮、東三条の院におはしませば、正月二日行幸あり。いとみじうめでたうて、宮司・殿の家司など、加階しよろこびのしる。

とあるものであるが、これは年始恒例の行事で該当しない。

二度目の行幸は十月十四日。記録類には次のように記される

永延元年（987）十月十四日癸卯

天皇行幸撰政東三条第、命行詩宴、題云「葉飛水面紅」、又召擬文章生、奉試、題云「池岸菊猶鮮」、又音楽、又授角振神、隼神又有勸賞

（『日本紀略』）

これは去る七月二十一日、<sup>注14</sup>焼亡の後新造成つて撰政兼家が移徙したばかりの東三条第への行幸であり、詩宴・擬文章生の奉試が行われた盛儀であつた。寛弘三年の花宴でも『御堂関白記』三月一日条に

寛弘三年の花宴でも『御堂関白記』三月一日条に

召善言朝臣、仰可有来四日行幸由、又賜彼日可召文人等名簿、擬文章生等同召之、

とあつて擬文章生が召しにあずかることになっていた。しかし雨に依つて召さなかつたことは先に引いた四日条に明記されるところである。三月四日の花宴と、二十年前は初冬の十月十四日菊花の宴と季節は異っているが、また東三条第の主は兼家から道長の代へと變つてはいるが、同じく一条帝を迎えての花宴である。二十年前の宴につらなつた人々に往時を思いおこさせるに十分な花宴の再現であつた。匡衡もまた二十年前の宴につらなり作詩した一人であつた。『江吏部集』(下)に「初冬陪<sup>レ</sup>行幸撰政第一同賦<sup>下</sup>葉飛水面紅<sup>上</sup>應<sup>レ</sup>製」として一首を収める。

そして二十年後の花宴の詩序の冒頭には

洛城有<sup>二</sup>一形勝<sup>一</sup>。世謂<sup>二</sup>之東三条<sup>一</sup>。本是大相国<sup>二</sup>之甲第<sup>一</sup>。伝為<sup>二</sup>左丞相之花亭<sup>一</sup>。聖上不<sup>レ</sup>忘旧里。再備<sup>二</sup>天臨<sup>一</sup>。始廻<sup>二</sup>翠華<sup>一</sup>。一日禮<sup>二</sup>外祖於当時<sup>一</sup>。今准<sup>二</sup>紫禁<sup>一</sup>。二年移<sup>二</sup>朝議於此地<sup>一</sup>。

このような次第で多少の問題をはらみつつも寛弘二年正月廿日には伊賀守としての任を終えた為義は、二月七日には早速内蔵権頭として内蔵寮の使で春日社に詣で、既に五日から同じく春日祭使として参詣していた行成と同道帰京の旨、権記にみえるから、おそらくは一月廿五日〜廿七日の除目において首尾よく内蔵権頭を拝任したものであろう。こうして再び為義の京官としての生活が始つたのである。

明けて寛弘三年三月四日、東三条第南殿に天皇、中宮出御のもとに花宴が催された。この日は、去る十一月十五日の内裏の火災<sup>注13</sup>によつて二十七日道長の東三条第に行幸、そのまゝ御滞在であつた天皇・中宮が、一条里内裏へと移御される予定になつてゐた、行幸に先立つての花宴であつた。

辰の剋出御になり、倫子以下家子、家司等に増爵、加階の儀があり、その後文人を召し詩題が献ぜられた——作文にかかわる部分を『御堂関白記』によつてみよう。

依次仰、召文人等、雖雨止、西廊内賜座、以勘解由長官、令召之、参着後、承仰、権中納言（忠輔）献題、渡水落花舞、奏聞後、<sup>（同カ）</sup>聞人付韻字、輕字、召匡衡朝臣、賜題、仰可献序由、未献題前、実成・頼定等献御硯・紙等、内蔵権頭為義、率殿上五位、硯賜公卿召人、次大納言以下献々物於庭中……兩三献後、船樂発音、龍頭鶴首数曲遊浪上、当御前留船、奏舞各二曲、此間上下文人等献文……擬文章生依雨不召、  
（『御堂関白記』）

記録に示されるように権中納言忠輔によつて「渡水落花舞」の詩題が献

ぜられ、仰せによつて大江匡衡が序を献じた。内蔵権頭為義も殿上の五位を率いて奉仕、作文に列している。

そして、その応製の一首を、匡衡の序に続いて左府道長、儀同三司伊周、左金吾公任、右金吾齊信、源明理、紀為基、源孝道、藤原為時、藤原広業らの詩と共に『本朝麗藻』にみることができる。

（七言、暮春侍宴左丞相東三条第同賦）

渡<sup>レ</sup>水落花舞 応<sup>レ</sup>製詩一首<sup>（以輕為韻）</sup>  
橘 為 義

洞裏落花令 眼驚。 洞裏の落花眼を驚か令め

紛々渡<sup>レ</sup>水舞猶輕。 紛々として水を渡り舞うは猶輕し

霞応<sup>レ</sup>羅袖<sup>（經）</sup>流處。 霞は羅袖に應えて流れを經る処

鶯是鳳釵過<sup>レ</sup>浪程。 鶯は是れ鳳釵にして浪を過る程

赴<sup>レ</sup>節斜遮沙月色。 節の赴けば斜に遮る沙月の色

廻<sup>レ</sup>臺被<sup>レ</sup>送岸風声。 台を廻り送らるる岸風の声

何唯芳樹浴<sup>（恩澤）</sup>。 何ぞ唯に芳樹のみ恩澤に浴さんや

二十年前花下情。 二十年前花下の情

為義も他の人々と同様今日の盛事に逢つたよろこびをかく賦した。今日の趣向は、趙后飛燕の太極池歌舞の段をふまえるようで、匡衡の序文に言う

……盖当<sup>（曲水之翌日）</sup>。 翫<sup>（艶陽之風光）</sup>也。 觀夫落花不<sup>（閑）</sup>度<sup>（水）</sup>

自舞。 遮<sup>（沙風）</sup>而宛<sup>（宛）</sup>轉。 廻<sup>（雪之袖暗翻）</sup>過<sup>（巖泉）</sup>而婆娑。 落霞之琴

遠和。 至<sup>（下）</sup>夫赴<sup>（赴）</sup>節之度無<sup>（定）</sup>樣。 応<sup>（中）</sup>声之体有<sup>（嬌粧）</sup>……

一月二十日のくだり、上洛途上、海の中から上ってくる月を見て、遠く安倍仲鷹を思いつつ詠んだ貫之の歌、その心境へと赴いたものであろう。<sup>注10</sup>

みやこにて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ(海後撰)  
(海後撰)

と詠んだ貫之の歌の、一三句を借りての作で、成功している。<sup>注11</sup>

旅中の実作は他には残っていないが、異郷の風土にふれ、折につけての詩作または詠作は十分考え得るところであろう。

宇佐からの帰洛は記録が残らず詳らかではないが、長保元年の宣孝の例<sup>注12</sup>などからすれば、遅くとも翌寛弘元年の二月中には帰洛していたものと思われる。そして三月九日には、春宮居貞親王の昇殿者の定めで、源経頼や伊予守高階明順らと共に為義も昇殿を聽されている。また、伊賀守に就任して四年目にさしかかった為義は、国司としてやはり人しなみの労苦を抱いていた。同寛弘元年十二月十三日には減省の申文を奉ったのである。前任者は現右少弁、詩作につけ詠歌につけ、文芸面でも同座することの多い輔尹であった。このことについては前稿でも為義の伊賀守補任についての考察でふれるところがあったし、また次に引く『権記』の記事も紹介したが、減省申文にかかわってもう一度引用してみたい。

十三日壬辰 早朝奉親宿祢来云、左府云、信濃国重減省解文、左中弁在任国之間、越可申、是違例也、然而至于上宣早可承從也、参衙、右衛門督為曰上、余就庁、南所申文、伊賀守為義申減省申文、被難之旨両端也、然而皆先例、其一、主税勘文定納官租散注云、過分不献、

仍不足、是前司輔尹本年帳定也、勘本年何不注其数、今一者、当任長保四五六并三年申請続文、前司輔尹申長徳四年長保元二三、而税寮勘文、長保元年勘定、其後同二三兩年注未勘、是如何者、彼不堪言上不足事、依不足不注其数也、前司任中長保三年以二年為任終、仍未勘也、後司公文勘合次可勘也

(『権記』)

『権記』には右のように詳しく記されている。まず信濃国の重ねての減省解文に難なく解決をつけたことが奉親からもたらされていた矢先のこと、登庁してみると折から提出されていた為義の申文に対しては難がついてたというのであろうか。二つのことの比較においての言葉であろう「被難之旨両端也」とは。前司輔尹時代からの不足があり、その数字の不備、長保二三年は未勘であること、しかし三年の分は前任者が二年で任終えることになるので後司為義の公文勘合に際して勘えるべきである由、等々が審議された様子であるが、こうした行成らの公平な理解にもとづく好意的見解などの一助あつてか、翌二年正月二十日に行われた受領功課では「任中済事」が下された。実資はその日の日記に為義を筆頭に記している。

寛弘二年正月二十日条

(ママ、正シクハ義)

定申受領功課事、伊賀為儀任中済事

尾張知光、遠江経通、武藏惟風、信濃清政二ケ年、能登則友、因幡惟憲、子剋定了  
任中済事、豊田奉親、肥後兼忠任中済事、阿波国平、任中済事、

(『小右記』)

5 あかでのみいりぬる月をこりすまにをしむは人の心なりけり 勝

遥聞郭公

19 はるかにもきくはかひなし郭公わが宿ちかくなきわたらなむ 勝(但し

二十巻本は「持」とする)

対水辺松

33 君が代に一たびすめる水の面に千年の松のかげぞうつれる 持

式部大丞行資

6 いづこにもをしみやすらむきみだれのそらをもわかずてらす月をば

20 まだあかぬ人につげばや郭公ほのかにきくもねられざりけり

34 きしちかくまつやしるらむ池水はいくよをへてかまたはすむべき

比較参考のために番えた行資の歌を後に記したが、為義は右に記した如き判を得た。

この日の歌は、「当座即詠の歌合であつたためか勘能な詠み手の輔親・道済・善忠・長能・嘉言らがいたにもかかわらず、さほどの秀歌はなく<sup>注9</sup>」、為義の歌もこれらの人々に伍して遜色あるものではない。

為義の前掲33番の歌「君がよに一たびすめる水の面に千年の松のかげぞうつれる」が、萩谷氏御指摘のように同座の当代の著名な歌人曾祢善忠のかつての作、『詞花集』所収(三八五番)の「田融院御時、堀河院にふたたび行幸せさせ給けるによめる みなかみをさだめてければ君がよにふたたびすめるほりかはのみづ」の三四句に範を得ていることはおもしろい。

強いて言えば専門歌人の発想に向ける為義の学びの態度がうかがえはしまいか。同様のことは次項に述べる後拾遺集所収歌にも言えるようである。

四

道長家歌合から半年後の十二月四日、為義は宇佐神宝使にたつた。記録によれば

長保五年十二月四日己未

参内、発遣宇佐使、伊賀守為義朝臣也、未二剋御覧神宝御装束等、同剋有御襖、先南第一間昇立机一脚、敷延掃部奉献、御装束一具、剣一、鏡一、御幣一捧等置之、宮主使等候庭中、御祓物仰之如例、了撤御祓物、御拝之後使参上、昇出御宝等如例、召右大将令奏宣命、予候、下見之、宣命二通、使官符物文、使祿綿外印、予承上卿命、於結政所令捺(以下略)

との恒例の儀式の後、筑紫への旅の途についたようである。途上での一首が『後拾遺集』羈旅にみえる。

うさのつかひにてつくしへまかりけるみちに、うみのうへに月をまつといふころをよみはべりける

橘 為義朝臣

526 みやこにて山のはにみし月かげをこよひはなみのうへにこそまで遠ざかる都に思いを馳せつつ下る西海道、師走の暮れは早い。眼前に広がる波の間に月に月の出を待つ為義の思いは、自ら『土左日記』承平五年

席作詩したものであらうと思われる。藤原為時は十五日の歌人の一人でもあった。

引用した『権記』の、詩題の「緑」及び韻の「流」は、「絲」と「緑」の、また「浮」と「流」の行・草体の極めて類似していることからの誤写であらう（詩題は本朝麗藻の「雨為水上絲」「韻浮」が正しい）。

さて、十五日は卅講の後「惜夏（夜）月」「遥聞郭公」「対水辺松」の三題による和歌合<sup>注7</sup>が行われた。左右歌人については十卷本・二十卷本で左右の歌人名に交替がある。今、十卷本によれば、

左 輔親（大中臣）神祇権大副 輔尹（藤原）右少弁

為義（橘）伊賀守 道濟（源）式部少丞

嘉言（大江）彈正少忠 祐挙（平）道長家司

為憲（源）前美濃守

右 兼澄（源）前若狭守 長能（藤原）前上総守

行資（橘）式部大丞 為政（慶滋）外記大夫

善忠（曾祢）丹後掾 敦信（藤原）前肥後守

為時（藤原）前越前守

の構成である。こうして見れば、この歌人たちが如何に余り恵まれない、身分高からざる人々であつたかを今更ながら実感せざるを得ないが、殆んどが在京者である。為義は京に極めて近い伊賀守であつたため、この日のために呼ばれたものであつたらうか。

周知のごとく輔尹・為義・道濟・為憲・為政・敦信・為時らは漢詩文に

堪能な者達であり、いわゆる和漢兼作の者である。また歌人の名の高い輔親・嘉言も共に文章道の出身者であり、詩文は残らずともその方面には決して暗くない存在であつたはずである。そして兼澄もまた、これより後になるが「文千余卷」を道長に献じた（寛弘三年四月四日『御堂関白記』）ほどの蔵書家であり、為義と和歌を番えた同族の橘行資は、祖父に好古を、冷泉帝の侍読をつとめた右大弁為政を父にもつ学問の家の出であつた。行資自身が文章道の出身者か否かは明らかにしえないが、大炊亮所雑色から長徳二年正月十日蔵人に補され（『小右記』）、蔵人式部丞を経て長徳四年七月十四日叙爵（『権記』）、歌合当時式部大丞の官歴からは、少なくとも文章に堪能であつたろうことは想定できる。同様に祐挙もまた中務少丞

（『改元部類記』天禄元年（970）条）、式部大丞（『本朝世紀』寛和二年（986）二月十六日条）を歴任している。こうした人々に、著名な歌詠み曾丹及び長能を交じえての歌人構成であつた。

本歌合は道長家の私的な歌合であり、したがって歌人の撰びも、親近の歌詠みたちに限られていた。詩人的教養を重んじる道長の好尚による、歌会的実質的な風雅であつたらしい。<sup>注8</sup>

かつて詮子四十賀の屏風歌を詠進した為義ら、輔親・輔尹・道濟・為時・兼澄の面々が本歌合にも顔をそろえている。

為義の歌について見よう

惜夏月

伊賀守為義

神樂したる所に、兼澄

神山にとる榊葉のもと末に群れ居て祈る君がよろづ代  
などありし

とあるのが、その一端を知りうるすべてであつて、後は詳らかにしえないのが現状である。

なお『公任集』にも「女院の四十の御賀の屏風の歌、もしもやとてまうけ給へりけれども、さもあらざり、花ある所」・「松おほかる所にて、みな月はらへしたる所」・「七月七日、女、おとこに物いひたるけしきしたる所」の詞書で正月・六月（二首）・七月と断片的ながら四首<sup>注5</sup>がみえる。名実ともに秀れた歌よみをもつて任ずる公任のこと、必ずや詠進の依頼のあらんことを自負して準備していたにもかかわらず、その沙汰なく終つたの意に「もしもやとてまうけ給へりけれども、さもあらざり」の詞書からは受け取れる。ところが『権記』の記述では、十月七日、四十の賀の試楽の後、御前に召された道長・内大臣・新任左右金吾（公任・齊信）が御前に伺候し、その場で左相府道長と左金吾公任が「詠御屏風和歌」じたとある。行成染筆の前夜のことである。したがって輔親や兼澄らと同列に御沙汰は無かつたものの、つまり、家集所収歌とは別に、身分柄からも当然の別格の形で詠進の機会を得た、と解し「書御屏風四帖和歌十二首（左大臣三首、輔尹一首、兼澄三首・輔親一首・為時一首・為義一首・道濟一首）令奏覽」（『権記』八日条）と記された実質十一首の「後の一首は公任の和歌であつたろうか」と、前稿で推測したしだいであつた。が、前稿では『公任集』

等についての注記を怠り意を尽さなかつたので、ここに補つておきたい。ただし、この解は史料大成本『権記』の「詠御屏風和歌」の「詠カ」の読解にゆだねたものであることは言うまでもない。「詠」の草体「ゆ」と「禄」の草体「ゆ」の類似による誤写カと解されての注記であらうと思ふが、若し「揺」（撰）との誤字であつたとすれば、私の解釈は改めねばならない。写本を直接見る機会をえないので、今は「詠」によって解しておきたい。<sup>注6</sup>

### 三

為義が伊賀守として赴任した翌々年の長保五年（1003）五月十五日、左大臣道長家の法華三十講にともなう法樂歌合が土御門殿において催された。法華三十講は五月一日から始つたが、その初日、開經の講後作文が行なわれた。『権記』によれば

一日庚寅 参衙、詣左府、卅講初、院源僧都、林懷已講為證者、朝晴為講師、日助問、事了有作文事、文章博士以言宿祢為題者、以雨為水上緑為題、韻流、乃以言序者、

二日辛卯 午剋講詩畢

とあつて、翌日にかけての實質的な作文会であつたことを想像させるが、出席者・詩作者等についての詳しい記述はない。しかし『本朝麗藻』には「卷上」に「雨為水上緑<sup>以レ浮</sup>為レ韻。」の題で、源伊頼・菅宣義・藤為時の詩が見えるから、恐らく後に述べる十五日の歌合に参加した漢詩文家たちも出

# 橘 為 義 考 (二)

——道長親近の一家司層の生涯——

福 井 迪 子

「橘為義考」(一) (本学人文学会論集「人文」第九号、昭和六〇年六月発行所収) では、その出自から長保三年秋、伊賀守として赴任に至る間のことを述べた。

本稿では、伊賀守在任時代 (長保三年秋赴任、寛弘元年正月) から、京官にもどって内蔵権守、左衛門権佐としての活躍期をむかえる寛弘期における為義についてみたいと思う。このいわゆる「一条朝の盛時」には、道長家歌合をはじめ、東三条第花宴、作文会など諸行事にまつわる公私にわたる文芸の場があった。詩文、和歌ともに現存する実作は少ないが、為義にとつてもその生涯を通じての詩作・詠作活動の中でも、この期がもっとも集中的に文芸的な場の与えられた時期ではなかったかと思われる。

はじめに前稿で述べた東三条院四十賀屏風歌詠進にかかわつての若干の補いをし、長保五年五月十五日の道長家歌合から述べたい。

## 二

長保三年十月九日、一条天皇の行幸のもとに上東門第において催された東三条院四十賀に際し、為義もその屏風歌詠進の栄を得たことについては前稿で述べた。これは為義もまた当代の最高為政者道長に最も身近かな歌詠みとして数えられる一人であったことを意味するものであろう。そしてこのことは、現存歌が少ないが故に、一しお為義の当代における文芸面での占める位置を知る上で、その意味は大きい。

この屏風和歌の詠進については、十月八日条の『権記』に「祭主輔親所進和歌十二首」と、輔親の詠進歌数が示されており、また『輔尹集』には正月・二月・三月・四月・五月・六月・八月・こしのしら山 (十二月か) の八首<sup>注1</sup>が現存すること、そして『道済集』にも、家集中の位置および内容からこの屏風のための詠作と思われる十一首<sup>注2</sup> (『上代倭絵年表』は、この屏風のためのものと推定している) などが推測され、道長は別格としても、輔親以下の詠進の命をたまわつた歌人たちは、それぞれ少なくとも月次絵の歌十二首を詠進したものであつたらしいと推察される。為義もまたその例外ではなかつたであろう。

しかし、採択歌と思しき歌についても『栄花物語』「とりべの」に御屏風の歌ども、上手ども仕うまつれり。多かれど同じ筋の事は書かず。

八月十五夜に男女物語して妻戸のもとに居たるに、弁の資忠<sup>注4</sup>天の原宿し近くは見えねどもすみ通はせる秋の夜の月